

2021年5月9日 久宝教会 家族の日礼拝(復活節第6主日礼拝)

メッセージ「蟬の声より蛍の光」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 6章 1-15節

本日の聖書は、『マタイによる福音書』6章です。これは「心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである」という言葉で5章から始まる、有名なイエスの山上の説教の続きです。この6章1-15節では、その人たちのものである、と言われたような天の国の住民たる者の行動が、不純な動機によるものであってはならないのだということを、施し・祈り・断食というユダヤの三大善行のうちの2つを例に挙げて説明しているところなのだ、ということらしいです。

1節には「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい」とあります。偽善者たちは、貧しい人々に施しをしようとする時に、会堂や通りでラツパを吹きならして募金を集めたといいます。これ見よがしな姿勢が問題なんでしょうか。いや、でも私は思いますけど、実際偉いですよ、彼らは。貧しい人々のために、私がしないことを代わりにしてくれているんです。私でも、チャリンと募金する時にきつと言います。もしくは、心の中で思います。「この暑い中、御苦労さま。えらいね。がんばって」。それで彼らが私腹を肥やしているのならまだしも、それが本当に貧しい人々のために使われているのなら、彼らを偽善者呼ばわりするのはあまりに気の毒ではないか。

人前で善行しているからといって、彼らを偽善者呼ばわりする資格なんて、私たちにはない。私たちにはないんだけど、神様、全き善のお方である神様の目には、もしかするとちょっと違うように見えるのかもしれない。そういう募金活動をしている人の中には、純粋な思いでやっておられる方々もおられるでしょう。しかし、そこまで純粋な動機でない人もいるかもしれない。その場合、やっていることは結果的には善いことなのだけれども、本物の善行とはいえないかもしれんなあ、と神様は思われるかもしれません。だから私たちは、人前であってもなくても、純粋な気持ちで善行をできるようになれたらと思うのです。

もう一つ、こちらが今日のメインテーマですが、祈る時について。「祈る時は、偽善

者のようであってはならない」とあります。彼らは、人前でやたらと祈りたがる。「祈ることはよいことであるが、それが人の賞賛を得るための手段となってはならないのだ」と、イエスは言うわけです。私たちの祈りは、神様に聞き届けていただき、時に神様より答を与えられることによって報われるものですが、人前で祈りたがる人々は人々の賞賛を得た時点で報いを受けてしまっているのです、神様からの報いは無効となってしまふことに注意せよ、ということです。しかし人前で祈ることも時にはあるでしょう。人前で祈ることが必要になる場合もあるでしょう。ただ、イエスが言っておられるのはそのことではなく、人前で祈るという行為によって、人から良く思われたい、信仰深いと思われたいという邪念が生まれないように気をつけよ、ということなのです。私は10年ほど前に、研修でドイツに行ったことがあって、そこであるアメリカ人の女性と出会ったのですが、「あなたもクリスチャンですか?」と尋ねたところ、「そうです! 私、毎日祈ってます!」という答えが返ってきたことを思い出します。毎日祈っているかどうかは聞いていない、あなたがクリスチャンかどうかを聞いただけなのだ。信仰深いと思われたいんでしょうね。

また昔、私が担当していた教会と、同じ地区の複数の教会で合同の祈禱会があり、その後何人かで連れ立って食事に行ったことがありました。そこで「いやー、僕もT先生のように上手に祈れる人になりたいですわ」といった話をしていましたら、別の教会の信徒さんが「いやー、水谷さんの祈りを聞くとほっとします。あーんな祈りでもいいんだって」。嫌味で言われたわけではまったくなく、その方はつたない私の祈りに対するフォローとして言って下さったわけなのですが、私は何とも複雑な思いになったものでした。

いまさら改めて言うまでもないのですが、祈りは神様との会話です。神様に対するあふれるほどの感謝の思いや、誰にも言えない苦しい思いを私たちは神様に対してどんどん話すべきです。そして特に信仰の導き手であるべき牧師は、みんなに率先して祈りの姿を示さなければならない。「神様にお話するのに形式なんてない。ほら、こんなふうな祈りでも神様はちゃんと聞いてくださるんですよ」。その姿を見て、ああなるほどそういう祈りもあるね、そういう語り方もあるね、そういう感謝の表現もいいね、と私たちみんなの祈りはより豊かなものになってゆく。その意味におい

て、牧師の祈りまたは私たちがみんなを代表して祈る祈りは大切なものなのだ、と私は考えていたし、今も考えている面があるのです。しかしそんな私にキリストはいうのです。「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい」「祈る時は、偽善者のようであってはならない。彼らは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈ることを好む。よく言うておく。彼らはその報いを既に受けている。あなたが祈る時は、奥の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。祈る時は、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。彼らは言葉数が多ければ、聞き入れられると思っている。彼らのまねをしてはならない。あなた方の父は、願う前から、あなた方に必要なものをご存知なのだ。」

あなたは何のために祈るのですか？ みんなに見せるために祈るのですか？ それで「さすがですねー」とか言われたいのですか？ あなたは神様と話したいと祈っているものの、その心は神様ではなく周りの目を意識し過ぎてしまっていないですか？ あなたの周りにいる子どもたちは、親と話すときに人目を意識して話しているでしょうか？ … と、まあいろいろと改めてそう振り返ると、ああ私ももともとは、神様にもっと上手に自分の思いを伝えたいという気持ちでいっぱいだったのに、知らず知らずのうちに周りを気にしてカッコつけの人間になっていたのかも知れません。大事なのは言葉ではなく、周りから私がどう見えているかでもなく、神様に向き合う姿勢だったはずなのに。

みんなを代表してささげるお祈りは、人前で歌を歌うのとは違うのですから、うまくできたからうれしいとか、うまくできないから恥ずかしいとかいうものではない。このあとの賛美歌（『讚美歌』308番）で「祈りは口より出で来ずとも、まことの思いのひらめくなり。祈りは幼きくちびるにも、言いうるた易き言の葉なり」という歌詞がありますが、まさにその通りで、7節に書いてあるように言葉数が多ければいい祈りというわけではなく、祈りは口から簡単に、流暢に出て来なくともいいのです。神様のことを考えた時に、私たちそれぞれの心に浮かんだ真の思いこそが、祈りなのです。そして神様は、私たちが口には出さずとも、その心に秘めた本当の思いをご存知なのです。ただ、そうは言っても「神様。いろいろお話ししたいことはありますが、

それはすべてあなたをご存知です。アーメン」で終わらせるのはあんまり楽をしすぎですから、心の中の素直な思いをできるだけ神様に対する言葉にしようとする努力は、ある程度は私たちに求められているかもしれません。だから、「祈りは幼きくちびるにも、言いうるた易き言の葉なり」とあるように、幼い子どもの口でも言うことのできる易しい言葉で祈ればいいのです。そしてその祈り、人々の賞賛を得るための手段ではない祈りというものは、何も密室でなくともどこでもいい、神様と1対1で向き合うことから始まるのです。1対1での神様との対話の経験があってこそ、私たちは公の場においても神様といつも通り対話をする勇気、またいつも通りのその言葉が与えられてゆくのかもしれません。

「鳴く蝉よりも鳴かぬ蛍が身を焦がす」ということわざがあります。思いを口に出して言う者よりも口に出さない者のほうが心の中ではいっそう思い焦がれているものだ、というような、恋に関係する意味のことわざらしいです。じわじわと必死に鳴く蝉も、暗闇で静かに光る蛍も、いずれも自分の思いを一生懸命伝えようとしているのですから、どちらがよいとかセミではだめだとかいうことはないのですが、ただ私は個人的には、暗闇で静かに思いを込めて光を放つ蛍のようでありたいと思うのです。いろいろと上手に言葉を操ることができなくともいいではないか。かっこつけるのはやめよう。私は私なりの語り方、祈り方で神様に向き合ってゆけばいいではないか。開き直るわけでは決してないけれども、ありのままの自分を大切にしよう。隠れたところを見ておられる神は、その暗闇のかすかな光をもしっかりと見つけてくださる方だからです。願わくは、その光を「ほらほらきれいでしょう!」と神様以外に向ける誘惑に負けないように気をつけたいと思っています。

最後に、今日は「家族の日」ということで、一つだけ付け加えたいと思いますが、家族に対しては、蛍ではなく蝉として、ちゃんと言葉を尽くして気持ちを伝えた方がいい。神様に対しては、蛍でいいけれども、家族に対しては蛍ではいけない。人間に対しては、ちゃんと言わないと伝わらないので、蝉のように、いつもありがとう、愛してるよって、言葉を尽くして伝えた方がいいかもしれません。神様には蛍、家族に対しては蝉となって、愛と感謝の気持ちを伝えていきたいと思っています。